――「練兵の後で」（仮）より

……何だそれは」

人の悪い笑みを浮かべて言うミハイルから強引に左腕を引き戻したノーンは、その左腕どころか、光輝まで自分の神経を悩ませていた水の病みの様のように消えてゆくことに気付き、ブるブるに動揺した。腕を掴んでいたからの水の催かな時間で、亀裂骨折から打撲に至るまで、全て綺麗に癒やしてしまったというのか。以前に出会ったアルスからいうケーキル・サート・フェアウスの“影”に勝るとも劣らない治癒能力者ではないか。

「……勝手ばっかりしやがって」

「ああ、お前が嫌がるっと勝手にしたっただけだ。だからの事が、俺に貸しが出来た」

ぐっちいこと思っておけばいい」

「ふ、ワリー・ロフアからの頼みでな。……それは言う」

彼が渋々ながらも頭をポリポリと掻くと、相手は少し意外そうな表情になった。

「医理屈を捏ねるな」

「ケッ。ワリー・ロフアからの頼いたタ人なんだよ」

――「練兵の後で」（仮）より

架空世界の歴史群像小説『ミディアミルド物語』の書きかけ外伝から抜粋を切り出し、折本にしてみました（「ぺらふぇす2023秋」合わせ）。

作品タイトルや章題も含めて未定稿なので将来の刊行物では変わってくるかもしれませんが、その辺りは御了承くださいませませ。

青き炎を巡りて 拾遺〈抄〉

－ミディアミルド物語外伝－

初版発行：2023年11月27日
頒価：0円（無料配布）
著者：定行美佳（筆名／野間みつね）
発行元：野間みつね個人サークル　千美生の里
発行責任者：定行美佳
連絡先：https://mitsune.jp/
（※メールフォーム有）

©2020, 2023　Mika Sadayuki

★この本の一部または全部を、著者の許可なく転載・複写・複製・改変等することを、堅く禁じます。

練兵の後で

マーナ近衛府にある近衛隊専用の大浴場には、白い湯煙が立ち籠めていた。

通常、この大浴場の広い湯船に湯が張られるのは、この時期だと四の付く日に限られている。しかし今日は、大規模演習が午後に予定されていたこともあって、例外的に湯の支度が為されていたのである。

ミディアム・カルチエ・サーガは、近衛副長タリー・リン・ロファから案内された大浴場を覗き込み、湯煙に霞む中でも見て取れるその大きさ広さに目を円くしていた。……無論、通常なら近衛隊員以外は利用出来ない場であるが、マーナ王ラド・ゾーン・オーディルが特別に許可したのであった。

「一刻ほどしたら他の隊員達が順次入ってきますので、余りゆっくりし過ぎないようにして上がってください。私の制服の替えで悪いですが、着替の上下はこの更衣所に用意しておきますから。あ、肩掛け布は流石にお貸し出来ませんけれど」

「ああ、コーブは自分で、ざっと洗っておく」

前日の雨による緩みの残る地面で激しい取っ組み合いを演じたせいで、中甲冑に護られていた部分以外は泥汚れに塗れている。コーブも例外ではない。ミディアムは兜を被らないから、青い髪も随分と酷い有様だ。

「カラスの大将閣下は？」

「先にさっさと入っているようですね。……昔は必ず、寒い日でも痩せ我慢の水浴び場に行ってたんですけどねえ」

タリーは苦笑いを見せる。

「三十を過ぎてもその状態で、私が「そろそろ体に悪いですよ」と言っても意地を張ってやめなかったんで、五年前の年末に、ちょっと手を回して、府内施療所の先生方に「特に寒い時期の水浴は体への悪い負担が大きい、湯を浴びて適度に湯船に浸かる方が体の回復も早くなる」と厳しく注意して止めてもらったんです。代々の隊長に比べればまだ随分若いと言っても既に今年で四十歳、あの人ひとりの体ではありませんからね」

「ふうん……」

「水練と体捌くは人って左手側に構まれていますので、適当にしようぜ。石鹸も同じ場所にあるんだが、共用ケットの使ったらこの場所に戻しておいてくれ」。上がってからは水を拭く大木は、着替えと一緒に置いておきます」

タリーが更衣所から出ていくのを見送った後で、ミディアムは、近衛隊長ノーラン・ヂャルムス・ノーラとの一騎討ち――と言ってもかたっぱしから挑戦し、そこっちは計この大浴場に怪しい――の後、ラフラの前へ戻ってきた。相手は、地上での格闘の最中に転くぶ柔内されたあの今迄、お〆じでもなく治しておきたい、と思ったのである。

（……あ、助かった。普通通じ力が使える）

此処ひと月近く、諸々のオーツプ“治癒”が使えない状態になるっとあっても不安だったのだが、今は問題なく“治癒”が使えるようだ。ホ・ッとしたのか、その他の撫過傷や打撲傷や切傷も、それから服を脱いで、黄色いコーブ用ノーブ手に目視する。

（……あ、やっぱりな）

大浴場に足を踏み入れる。……湯煙の中を見渡し、確かにノーンの姿があっ、と思ったのは、右手だけで体捌いを体に擦り付けている相手を幾度見し、西を眺める。だが、いきなり側に斜の体捌く、木桶を取り出ってたらゆ、し離れた場所で湯船の側に近寄るのは控え、やはり音を立てないよう何度かそっと近く歩く。泥汚れは粗方落ちた。

持ち込んだ石コーブを桶に汲んだ湯に浸けて絞り、それから腰をエ上げたミディアムは、隣踏ぐ、ノーンの傍らへ赤ん者を寄ると、「ちょっと失礼」と言いながら片膝を疲ると、泥汚れを拭ぐ。

（……あ、助かった。治せるようなら治しておきたい、と思ったのである。

「先にさっさと入っているようですね。……昔は必ず、寒い日でも痩せ我慢の水浴び場に行ってたんですけどねえ」

タリーは苦笑いを見せる。

「三十を過ぎてもその状態で、私が「そろそろ体に悪いですよ」と言っても意地を張ってやめなかったんで、五年前の年末に、ちょっと手を回して、府内施療所の先生方に「特に寒い時期の水浴は体への悪い負担が大きい、湯を浴びて適度に湯船に浸かる方が体の回復も早くなる」と厳しく注意して止めてもらったんです。代々の隊長に比べればまだ随分若いと言っても既に今年で四十歳、あの人ひとりの体ではありませんからね」

「ふうん……」

「……何だそれは」

人の悪い笑みを浮かべて言うミハイルから強引に左腕を引き戻したノーンは、その左腕どころか、光輝まで自分の神経を悩ませていた水の病みの様のように消えてゆくことに気付き、ブるブるに動揺した。腕を掴んでいたからの水の催かな時間で、亀裂骨折から打撲に至るまで、全て綺麗に癒やしてしまったというのか。以前に出会ったアルスからいうケーキル・サート・フェアウスの“影”に勝るとも劣らない治癒能力者ではないか。

「……勝手ばっかりしやがって」

「ああ、お前が嫌がるっと勝手にしたっただけだ。だからの事が、俺に貸しが出来た」

ぐっちいこと思っておけばいい」

「ふ、ワリー・ロフアからの頼いたタ人なんだよ」

彼が渋々ながらも頭をポリポリと掻くと、相手は少し意外そうな表情になった。

「医理屈を捏ねるな」

「ケッ。ワリー・ロフアからの頼いたタ人なんだよ」

やっ、っっちの腕だけ殆どの使わなくなってたもんな。骨に罅が入ってるぞ。治して しまうから少し力を抜け」

「――余計な世話だッ」

「放置してたら間抜ぶっ入っちゃなくなるだろ。俺と取っ組み合ったせいで負けたんじゃないかなんて後で周りから言われたら、っっちも嫌に障し。……ふうん、俺が途中で右足を痛めたのは気付いてたんだろ？。痛めた直後から、そっちには全然迫い詰められないっていうかったんだな。ある、ぉまいは何なってるけど黒し合いたいまて は別に仕掛けていたんだ。て、それわかった」

「偶々だ」

「ひゃあ、そういうことにしておくッ。気じゃるな。俺はもう自分の怪我は治ったぞ。お前の怪我も此処で癒やしておこうぜ。お互いに“なかったこと”になる。それで相子だ」

「こ、何処が相子だ」、貴様に借りが出来るだけじゃないか」

「ムー、悪い、もう治した」

――「練兵の後で」（仮）より